「ヒューマンインタラクションとアート・パフォーマンス」

Human Interaction and Art Performance

プロジェクト代表者：井口壽乃（教養学部・教授）
IGUCHI Toshino（Faculty of Liberal Arts, Professor）

本研究課題「ヒューマンインタラクションとアート・パフォーマンス」は埼玉大学重点研究プロジェクト「ヒューマンインタラクションの解明に基づく人間支援の脱領域的研究」（代表：山崎敬一教授）の研究課題をうけ、メンバーである**井口壽乃**と**牧陽一**がその小組織として設定した研究である。平成１８年度は「テクノロジーの芸術領域への応用」をテーマに、以下の２回のシンポジウムを企画・開催し、歴史的な観点から日本およびイギリス・アメリカ・中国の国際比較研究を行った。

Ⅰ．国際シンポジウム「日本から世界へ―デジタル表現のゆくえ」の開催

2006 年９月 18 日、東京都写真美術館との共催による国際シンポジウム「日本から世界へ―デジタル表現のゆくえ」（東京都写真美術館１階ホール）をヤシャ・ライハート（美術批評家、元ホワイトチャペル・ギャラリー館長、ロンドン）とリンダ・ラウロ・ロズィン（ニューヨーク、プラット・インスティチュート準教授）を招聘の上、開催した。

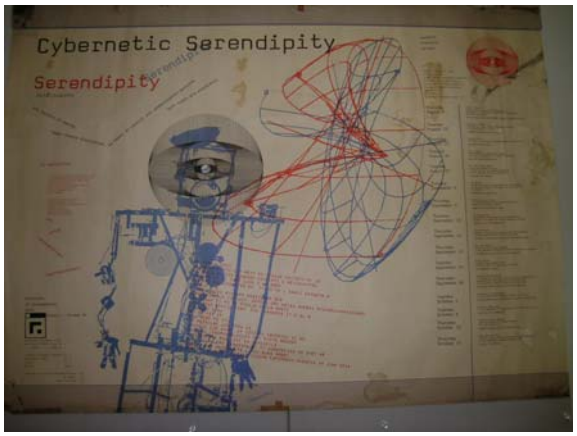
これは井口壽乃と研究協力者の森山朋絵（東京都写真美術館学芸員）が、従来研究をすすめてきた「戦後日本のテクノロジー・アートの歴史・文化史的研究」の延長として企画したものであり、森山朋絵企画の展覧会「ポスト・デジグラフィ」展（2006 年 8 月 12 日～10 月 15 日）に合わせて、国内外の研究者との意見交換を目的として開催されたものである。

Ⅰ－①　〈Cybernetic Serendipity〉展と日本のアート＆テクノロジー

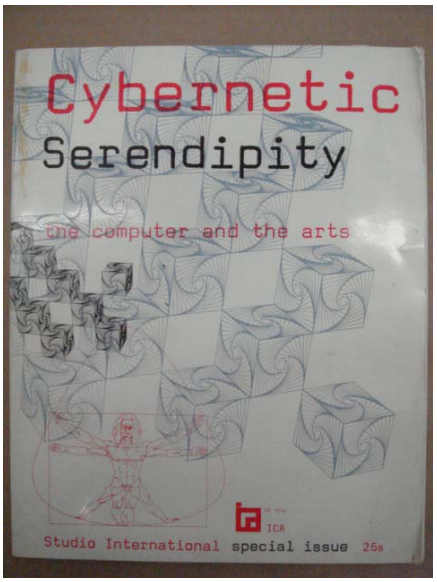
1968 年 8 月 2 日、ロンドンの ICA（現代芸術研究所）で開催された〈Cybernetic Serendipity〉展には、日本で最初のコンピュータ・アートを創造した芸術家と技術者のグループ「CTG」が出品した。この CTG の活動と〈Cybernetic Serendipity〉展との関係については、同展の企画者であるヤシャ・ライハートより詳しく報告を受け、当時の資料が、川崎市市民ミュージアムに保管されていることが、この度、発見された。川崎市市民ミュージアム所蔵の資料は、CTG の作品ならびに関連する史料、ヨーロッパにおける展覧会批評など貴重な資料が含まれていた。

〈Cybernetic Serendipity〉展では「どのように人間がコンピュータと新しいテクノロジーを利用して、創造性と創意工夫の視野を広げられるか」が実証され、同展おいて日本のエンジニアと芸術家との協働作業が、同時代の国際的な潮流に呼応した、初期インタラクティヴ・アートの萌芽的実験であったことが解明された。

本研究は、**井口壽乃**「戦後日本における「国際性」とアート＆テクノロジーの拡大」『戦後の日本における芸術とテクノロジー』（科学研究費補助金基盤研究Ｂ、課題番号 16320025）2007 年、p9-15．に公表した。



〈Cybernetic Serendipity〉1968 年、ポスター



〈Cybernetic Serendipity〉展カタログ

Ⅰ－②　「冷戦期の万博：アートとデザイン」

上記の研究結果を踏まえ、戦後日本の芸術におけるテクノロジーの諸問題を、「冷戦構造」と日本のナショナル･アイデンティティの視点から解釈し､戦後の日本のアートとデザインが 1970 年大阪万博に結実されることを結論として導きだした。**井口壽乃**によるこの研究は、イギリスのビクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム（V&A）で 2008 年に開催される「冷戦期のアートとデザイン」展のプレイベントとして、ブライトン大学と V&A の共同企画で行われたシンポジウムにて、口頭発表した。

Toshino Iguchi, *Osaka Expo '70: Constructing National Identity through Media Art*, The Cold War Expo: University of Brighton/V&A Research Symposium, London, 4-5 January 2007.

Ⅱ．シンポジウム＆パフォーマンス「アート・身体・インタラクション」

2006 年 12 月 9 日、埼玉大学総合研究棟１Ｆ日本学術振興会　人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来」との共催による「シンポジウム＆パフォーマンス　アート・身体・インタラクション」を武井よしみち（パフォーマー）、クリストフ・シャルル助教授（武蔵野美術大学）、柳沢秀行学芸員（大原美術館）を招聘し、パフォーマンスとシンポジウムを開催した。観客は 100 名ほどの大盛況であった。

Ⅱ―①　柳沢氏の報告では美術館の社会的効果として、子供たちへの実践的な教育的プログラムの方法を紹介していただいた。美術館が単なら展示の場所ではなく、また教育という一方向的なものでもない。学芸員と観客が相互に交流し、作品をつくっていく「場」でもあることが明らかとなった。美術館の新たな役割をインタラクションの面から追求した成果として大いに参考になった。

Ⅱ―②　シャルル氏はジョン・ケージから始まる環境音楽と自身の作品との関わりから説き起こし、作品をつくるフィールド・ワークの詳細、音源のサンプリングにいたるまで、詳細な報告があった。自己と外部・環境さらに自己内部に及ぶインタラクションの実態を自分自身、作品から具体的に知ることができた。

Ⅱ－③　武井よしみち氏は腕に巻いたセンサーに反応して、電子音が鳴り、胸部と股間に取り付けられた電球が点滅する代表的作品「大欠伸」の実演があった。この作品はもっともローテクノロジーによって身体と科学のインタラクション、さらにアーティストと観客の交流を生成する。1980 年代からの氏のアート活動経歴も詳細に語られ、アートと観客のインタラクションのあり方が具体的に提示された。

以上「アート・身体・インタラクションⅠ」ではアーティストと観客とのインタラクションのあり方について深い思索を促すものとなった。アーティストの「身体」、あるいは美術館という「場」が交流の基点となってアート空間が成立していくことが明らかになったのではないだろうか。そしてこの「場」「身体」に生成される「作品」は、アーティストのみならずその場を共有する観客も含有して成り立っていると考えられるだろう。

尚、このシンポジウムの内容については、『日本学術振興会　人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来　ミュージアムの活用と未来　鑑賞行動の脱領域的研究」平成18年度報告書』pp. 54-57、2007年3月に公表した。

Ⅱ―④　以上の思索を延長するため、平成１９年度は、国際的に活躍している中国人パフォーマー：朱冥 Zhu Ming（ジュー・ミン）蒼鑫 Cang Xin（ツァン・シン）を招き、2007 年 7 月 21 日（土）会場：埼玉県立近代美術館講堂・北浦和公園でパフォーマンス・シンポジウム「アート・身体・インタラクションⅡ」を開催する予定である。パネラーには、外山紀久子（埼玉大学）内野　儀（東京大学）栗山明（中国現代アート評論家）を予定している。

柳沢秀行の報告

シャルルによる音のパフォーマンス

武井よしみちによるパフォーマンス

会場風景

■平成１８年度の研究成果は、以下のとおりである。

【口頭発表】

Toshino Iguchi, *Osaka Expo '70: Constructing National Identity through Media Art*, The Cold War Expo: University of Brighton/V&A Research Symposium,　London, 4-5 January 2007.

牧陽一「紅い激情―文革の表象とその展開」日本現代中国学会第 56 回全国学術大会共通論題「文革 40 年と中国の現在」和光大学　2006･10･22（日）

牧陽一「紅い激情（第 2 版）―文革の表象と現代アート「星星」以降」

中国のアートシーン＜第 6 回上海ビエンナーレ＞＜第 2 回北京建築ビエンナーレ＞報告会、トーキョーワンダーサイト青山　2006･11･22（水）

【論文等】

牧陽一「黄鋭：不衰的一鼓作気　Huang Rui:　The Power of Persistance」『黄鋭 Huang Rui』カタログ　2006 年 4 月　Timezone8 Limited and Thinking Hands　p9-12　（中文・英文）

牧陽一「父、息子、画家の夢―失われゆく北京の路地で　映画「胡同（フートン）のひまわり」『BT 美術手帖』58 巻 883 号　2006 年 7 月号 p168, 169

牧陽一「中国現代アートが譲れないもの」『BT 美術手帖』58 巻 886 号

2006 年 10 月号 p16－19

牧陽一「プロパガンダの男と女―中国現代アートへ」『民博通信』114 号 2006 年 10 月 p10・11

牧陽一「中国現代アートの現状と課題」『アジア遊学』97 号　2007 年 3 月 p 162－171

井口壽乃「戦後日本における「国際性」とアート＆テクノロジーの拡大」『戦後の日本における芸術とテクノロジー』（科学研究費補助金基盤研究Ｂ、課題番号 16320025）2007 年、p9-15

【報告書・論文】

『日本学術振興会　人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来」報告書』2007年3月

【著書】

牧陽一『中国現代アート―自由を希求する表現』（講談社選書メチエ、2007年2月総222P）

■期間中に獲得した外部資金は、以下のとおりである。

井口壽乃：科学研究費補助金・基盤研究 C（一般）350 万円、研究課題名：「モダニズム期の印刷メディアとグラフィックデザインの越境に関する国際比較研究」（平成 18 年度～20 年度）

牧陽一：科学研究費補助金・基盤研究 C（一般）50 万円、研究課題名：「身体性を軸とした中国近現代文化史構築のための超領域的研究」（平成 17 年度～19 年度）